

巻頭写真 山口県秋吉台の二次林と薪炭利用

Secondary forests and firewood use on the Akiyoshi-dai Plateau, Japan

山口県中央部の美祢市に位置する秋吉台は石灰岩からなるカルスト台地として知られ、その独特の地形環境を背景とした植生や土地利用について古くより活発に研究が行われている。本地域は暖かさの指数からは照葉樹林帯に含まれ、台地縁部の斜面部には常緑広葉樹の二次林がみられる(写真1)。その詳しい組成や生業との関係について報告した渡邊ほか(2019)は、この二次林を二種類に区分した。一つは、伐採の影響を受けたアラカシ *Quercus glauca* やコナラ *Quercus serrata* などのブナ科樹木が優占する萌芽林(写真2)である。この萌芽林では特にアラカシが優勢で、株立ちかつ樹幹の細い個体が多いことから高い頻度で伐採されていたことが示唆される。炭焼き小屋跡には本種を含む広葉樹材が残置され



写真2 アラカシが優占する萌芽林。



写真1 秋吉台の麓より斜面部の森林を望む。





写真3 炭焼き小屋跡に残置された広葉樹材。



写真4 炭窯跡全景。形状は3種類確認され、奥行きや横幅は平均2 m程度である。

(写真3)、実際に炭焼きに携わっていた住民からもカシを用いた旨が語られるなど、それらが薪炭材として利用されていたことが明らかである。もう一つはタブノキ *Machilus thunbergii* が優占する林分である。台地上の草地内に保護された「長者ヶ森」と呼ばれる森林もこの種が占めており、当地域の森林植生における主要な構成種であることが示唆される。

また、林内に分布する炭窯跡についても形態や堆積物調査が行われている(写真4; 渡邊ほか, 2019)。底面部を掘削すると炭窯跡・炭焼きに由来すると思われる黒色または褐色の固結層が観察される(写真5)。この写真外の地点であるが、堆積物から産出した炭化材2点の樹種同定も行われ、クスノキ科樹木やスギであったことが報告された。クスノキ科の炭

化材は放射性炭素年代測定も行われ、江戸時代以降の値をとることから、この地域の二次林は江戸時代以降、薪炭利用の影響を受けている可能性が指摘された。

当地域における近代以降の植生と人間活動の関係について検討が進んでいる一方で、文献史料に乏しい時代の森林の構成種や配置は未解明な部分が多い。今後、台地の周辺部を含めて様々な植物化石を利用した古植生復原を行うことで、秋吉台地域全体の空間的な古植生の配置や、植生景観の変遷について議論が進むものと期待される。

引用文献

渡邊稜也・江口誠一・藏本隆博・太田陽子・清永丈太・田代 崇・齊藤 雅・山口広夏・岡田直紀. 2019. 秋吉台の西縁斜面における常緑広葉樹二次林とその利用. 秋吉台科学博物館報告 No. 54: 27-37.

(渡邊稜也・江口誠一・藏本隆博 Takaya Watanabe, Sei-ichi Eguchi and Takahiro Kuramoto)



写真5 炭窯跡底面部の堆積物。